

障害のある子どもの父親であること

—父親の語りから気持ちの変化に焦点をあてて—

GH091006：中 園 博 文

指導教員：藤田千鶴子教授

1. 問題

子育てをすることで父親・母親は人格発達をすることがわかっている（菊池 2008）。子育てをしている父親の内面に起こっている変化は、自分の人生を再考し、より豊かな生き方を求めることや、子どもや妻との間に深い愛情を育てるというものであり、彼らにとって喜びをもたらす成長であるとされている（前田2004）。父親が育児に参加することによって内面に変化が現れることを示しているといえるだろう。

障害児を育てている母親への研究は、母親への障害受容について、サポート源について、子育てについて、ストレスについてなど多岐にわたっており、関連する分野の研究も多い。父親を対象とした研究は、育児について（五十嵐・飯島 2001）、父親としての体験について（田中2004）、行動変容について（平野 2004）などがある。特に、父親への面接を用いた研究では、父親の当事者性、父親としての体験、気持ちについて述べられている。しかし、母親研究と比べて数が少なく、十分に研究されているとはいえない。そのような中で、父親はどのようなことを考えて生活しているのかということについてももう少し知る必要があるのではないかと考える。そこからまた新たな知見が得られるかもしれない。また、障害児の父親像についての研究はあまりない。父親としてどのような自己像を描いているのかも明らかにしていく必要もあると考えている。また、父親の気持ちの変化は同時に、父親像に影響を及ぼしている可能性も考えられる。更に、印象に残る出来事になにかしらの気持ちの変化に繋がることはないだろうか。また、障害児を育てている父親が母親からどのようなことを期待されていると考えているのか、また、父親は母親にどのようなことを期待しているかはあまり明らかにされていない。以上

のようなことがらについて、父親がどのようなことを具体的に認識しているのかを知ることが父親の支援に繋がるのではないかと考える。

2. 目的

本研究の目的は、父親の語りから得られた情報をもとに、父親は子どもが生まれてから現在までどのような気持ちの変化を経験してきたのか、気持ちの変化と父親像の変化にはどのような関係がみられるのか、父親としての具体的な役割をどのようなものとして捉えているのかについて質的研究方法によって明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

研究協力者 療育施設や親の会に通われている方を通して依頼し、同意が得られた父親5名。

調査期間 2010年7月～2010年9月（半構造化面接を行なった）

手続き 研究倫理遵守に関する誓約書、研究協力依頼書を説明し、承諾を受けた。

面接場所は、プライバシーを考慮し、自宅・公共施設で行なうこととした。また許可を得た上で、録音を開始し、調査協力者の意向でいつでもインタビューを中止できることを伝えた。

質問項目 予備面接を行ない、先行研究の項目もふまえて、質問項目を決定し、子どもが生まれたときからの気持ちの変化、印象に残っている出来事、父親像についての変化、母親から期待されていること、父親から母親へ期待していることなどを聞いた。

また、フェイスシートでは、父親の年齢、職業、子どもの年齢、家族構成などを尋ねた。

4. 分析

質的な分析方法として、空間、時間、文脈を主な分析の視点とした現象学的アプローチによる分析をおこなった。

5. 結果・考察

気持ちの変化 現在から診断を受けた当時を振り返ってみると、父親は葛藤しながらもゆっくりと変化があったことが語られていた。気持ちの変化には、健常児との比較、きょうだい児との比較、社会との比較をしながら変化していったことが語られていた。

印象に残る出来事 父親から語られた印象に残る出来事は、外に出掛けるなどのイベントではなく、家庭内での日常生活の一コマであった。日常生活の気づきとは「意思疎通ができたと感じたこと」「出来なかったことが出来るようになったこと」であった。具体的には、「名前を呼んだら手をあげる」「子どもが笑っている姿を見たとき」ということが語られていた。ここでは意思疎通と書いているが、父親からの語りでは、「こっちの言葉はわかっているか分かっていないかはわからない」「・・・本当に笑っているかわかんないけどそれは嬉しいですよ」「・・・足で反応ができるんだなあっていうのが分かったとき嬉しかった」と表現されていた。このことは、意思疎通ができたかどうかはわからないが、子どもが反応してくれたことがとても嬉しい気持ちであったことを表していると考えられる。

父親像の変化 子どもが寝たきりで常に介護が必要な場合、父親としての役割は、家事の手伝いなど、母親のサポートを強く認識していると考えられた。将来の父親像としては、将来への心配・不安が語られていた。

気持ちの変化と父親像 印象に残る出来事が気持ちの変化のきっかけとなっていた。父親の語りからは、子どもが父親の気持ちを理解してくれたかどうかよりも、子どもが少しでも反応してくれたことが強く印象に残っていた。父親はこのような出来事をきっかけとして「子どもをありのままに受け入れる」という気持ちになっていったと考えられる。

期待されていることとしていること 母親から期待されていることとして、父親は家事手伝いや子どもの世話を認識していた。子どもが障害児である場合、母親のサポートを強く認識しており、家事の手伝いなど積極的に関わっていかなければな

らないという気持ちの表れと考えられる。父親の語りからは、障害のある子どもを育てている母親に対して、期待するというよりもねぎらいの気持ちや感謝のような気持ちが強いのではないかということがうかがわれた。子育てについては、母親を信頼しており、母親や子どものサポートをしていかなければならないという気持ちが語られていた。

6. 臨床心理学的意義

本研究で得られた知見は、障害児を育てている父親の気持ちを理解する有用な情報になると考えられる。父親は、心の中では葛藤を抱えながらも仕事と家庭のバランスをとろうとして家族を経済的に支えようとする役割はもちろんのこと、母親のサポートも強く認識していることが語りから明らかになった。父親の気持ちは、葛藤を抱えながらも、ゆっくりと変容していき、日常の場面で、子どもが反応してくれたこと（意思疎通ができたかどうかはわからない）が、きっかけになっている可能性があると思われる。また、そのことが障害児を育てている両親の親としての発達にも関係していることも考えられる。父親像は、子どもが寝たきりで常に介護が必要な場合、家事や育児など母親のサポートとしての役割を強く認識しており、母親のように家事や育児などに関わっている父親の姿があった。以上のような障害児を育てている父親の気持ちを理解することは、母親への支援はもちろんのこと、父親への支援に役立つと考える。

引用文献

- 菊地ふみ（2008）：父親の育児2－育児経験と父親の発達－文京学院大学人間学部研究紀要Vol.10, No.1, 99-120
- 前田由美子（2004）：男性の子育てと社会環境についての研究－事例研究に見る男性の子育ての有益性－ 共愛学園前橋国際大学論集 No.4 69-84
- 田中美央（2007）：重症心身障害のある子どもを育てる父親の体験 自治医科大学看護学ジャーナル 第5巻 15-23
- 田中智子（2006）：障害児の父親の「当事者性」に関する考察 創発 大阪健康福祉短期大学紀要 第4号 49-57
- 五十嵐久人 飯島純夫（2001）：父親の育児参加への意識と育児行動 山梨医大紀要 第18巻, 89-93
- 平野美幸（2004）：脳性麻痺の子どもを持つ父親の意識と行動の変容 日本小児看護学会誌 Vol.13 No.1 18-23